

●モノグラフ  
小学生ナウ  
Vol. 12-5

しつけ

目次

親子関係の現在－国際比較を通して……深谷昌志……	2
<b>〔調査レポート〕 しつけ……深谷和子・石川洋子</b>	<b>13</b>
要約 ……	14
1. はじめに ……	18
2. 幼児の母親とは ……	21
●子育てが好きか ……	21
●母親として主婦として ……	23
3. しつけの実際 ……	25
4. 性差と年齢差をめぐって ……	32
●子どもの性別で ……	32
●年齢としつけ ……	36
5. 母親の属性に関連させて ……	43
●学歴と就園先 ……	43
●子育てが好きな母親のしつけ ……	45
6. 昔のしつけ・今のしつけ ……	50
●他の母親と比べて自分は ……	50
●夫と比べて ……	51
●昔の親・今の親 ……	51
●夫なら・実母ならどうする ……	52
●他人の子には ……	56
●自分の母親の影響 ……	58
7. 子育てと自己実現 ……	62
8. まとめ ……	66
<b>〔対談〕 養護施設の子どもたち……福島一雄 VS 深谷昌志</b>	<b>71</b>
資料1 調査票見本 ……	79
資料2 基礎集計表 ……	92

\*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

# 親子関係の現在

— 国際比較を通して —

静岡大学教授

深谷昌志

## 国際比較のなかで

まず表1に目をとめてほしい。これは、モノグラフではなじみ深いものだが、産業化された社会の子どもたちについて国際比較調査を行った結果の一部で、表中の数値は朝食をどこで食べたのかを示している。

こうした設問の意味がわかりにくいかもしれない。たしかに日本の場合、東京や仙台の子の98%ということはほぼ100%の子が自宅で朝食をとっているから、自宅以外での朝食は考えにくい。しかし、タイペイの子のなかで、朝食を外の店で食べた子が9%、歩きながらの子が5%に達する。また、シアトルやヒューストンの子で、朝食をとっていない子が多いのと学校で朝食を食べている子がかなりの割合を占めるのが目をひく。

日本でも、朝食を食べない子、あるいは、1人で朝食を食べる子などがふえたといわれる。たしかにそうした傾向が感じられるが、それは、日本的な視野で問題をとらえた場合で、諸外国の子どもと比較すると、家庭で朝食をとっている子が多いのに気づく。

ちなみに、表2に誰と朝食を食べたかの結

果を掲げたが、「自分1人で」という子は16%にとどまっている。それに対し、アメリカの子の5割以上は1人で朝食をとっており、家族とともにという子は例外的な形態にすぎない。

タイペイに限らず、香港やシンガポールなどへ行くと、早朝から町角に屋台が並び、人々が群がっている光景に出会う。豆乳や揚げパン、ぎょうざなどが1皿25円前後で安く衛生的な上においしい。だから、そうした屋台で朝食をとる慣習が定着するのも当然のように思える。

また、アメリカの場合、離婚が多いのはよく知られているが、このサンプルについてもヒューストンの子の6割、シアトルでは4割の子が親の離婚を体験していた。また、就労している母親も多く、そのため、朝食を食べられない子が少なくない。

そうした子どもへの対策として、ここ数年アメリカの学校ではブレイクファスト・プログラムを実施する傾向が強まっている。カフェテリアに牛乳やジュース、パン、サラダなどを並べ、朝食を提供するもので、さすがに学校関係者の間でも昼食はともかく、朝食

については疑問視する声が強いが、食べられずに登校する子どもたちの姿を見ると朝食プログラムをせざるを得ない気持ちになるという。

もうひとつ、誰と夕食を食べるかについての結果を表3に示した。朝食を1人で食べているアメリカの子どもたちも、夕食については「家族揃って」が6割を超える。それに対し、日本の子の場合、父親不在のまま夕食をとる子が3分の1に達する。

ここで、親子関係についての国際比較を試

みるつもりはない。ただ、これまでふれてきたような朝食の風景を素材とするだけでも、家族のあり方に社会による開きが大きいのがわかる。そうした観点からすると、現代の日本の親子関係を特徴づけるものは何だろうか。

先に紹介したタイペイやソウルはいわゆるNIESとよばれる地域で、アジアのなかでは経済的に安定している都市に属する。したがってアジアのなかでも、NIES以外の地域へ出かけてみると、貧困が家庭のなかに入

表1 朝食の場所  
— 外で食べる社会もある —

(%)

	東京	仙台	岡山	日本計	ソウル	タイペイ	シアトル	ヒューストン	アメリカ計
自分の家で食べた	97.5	97.6	97.3	97.5	93.9	84.6	78.5	58.2	68.2
外の店で食べた	0.3	0.4	0.4	0.1	0.3	9.0	1.7	2.1	1.9
学校へ行く途中 歩きながら食べた	0.0	0.1	0.0	0.4	0.7	4.7	1.3	2.3	1.8
学校で食べた	—	—	—	—	—	—	5.9	15.7	10.9
食べなかった	1.2	1.3	1.7	1.3	5.1	1.7	12.6	21.7	17.2
その他	1.0	0.6	0.6	0.7	—	—	—	—	—

表2 誰と朝食を食べたか  
— アメリカは1人で —

(%)

	東京	仙台	岡山	日本計	ソウル	タイペイ	シアトル	ヒューストン	アメリカ計
自分1人で	15.5	15.8	15.8	15.7	15.0	18.2	60.2	51.6	56.0
家族全員が一緒	32.9	32.4	28.9	32.0	51.3	38.7	10.8	11.2	11.0
父親だけ不在	25.9	25.2	20.9	24.7	19.0	19.5	10.1	6.4	8.3
その他	25.7	26.6	34.4	27.6	14.7	23.6	18.9	30.8	24.7

表3 誰と夕食を食べたか  
— 父親不在の日本 —

	東京	仙台	岡山	日本計	ソウル	タイペイ	シアトル	ヒューストン	アメリカ計
自分1人で	5.5	2.4	3.2	3.2	5.0	1.7	12.0	12.8	12.4
家族全員が一緒	41.6	40.8	41.3	41.0	55.2	73.5	61.4	65.9	63.7
父親だけ不在	34.4	41.7	34.7	39.1	29.4	16.6	13.5	11.5	12.5
その他	18.5	15.1	20.8	16.7	10.4	8.2	13.1	9.8	11.4

りこんでおり、子どもたちが学校へ通うこともできずに労働に従事しているのに出会う。いわゆる、ストリート・チルドレンの存在である。

そうしたアジアやアフリカの子どもたちを見るにつけ、子どもを貧しさから解放し、せめて子ども時代は家庭のなかですこやかに成長させたいと願う。そして、欧米では貧しい状況から脱したのはたしかだが、家庭そのものの基盤が揺らいでいるのを感じる。そうした状況がブラックファスト・プログラムとなったのはすでにふれた通りである。

### 父と母との同質化

こうした国際的な視野で問題をとらえてみると、国内ではとかく批判を浴びることが多いが、日本の家庭が子どもを保護する機能をかなり果たしているのに気づく。

それと同時に、親子関係などの考察にあたって、それぞれの社会の状況が異なるから、欧米のモデルをストレートにあてはめるのではなく、日本の現実をみつめて問題を掘り下げていく態度が必要になる。

とりあえず、図1に目を通してほしい。小学高学年生に父母のタイプについて尋ねると図中のような数値になる。このなかで目につくのは、子どもたちが、父親と母親をとともに、やる気があって頼りがいがあり尊敬できると

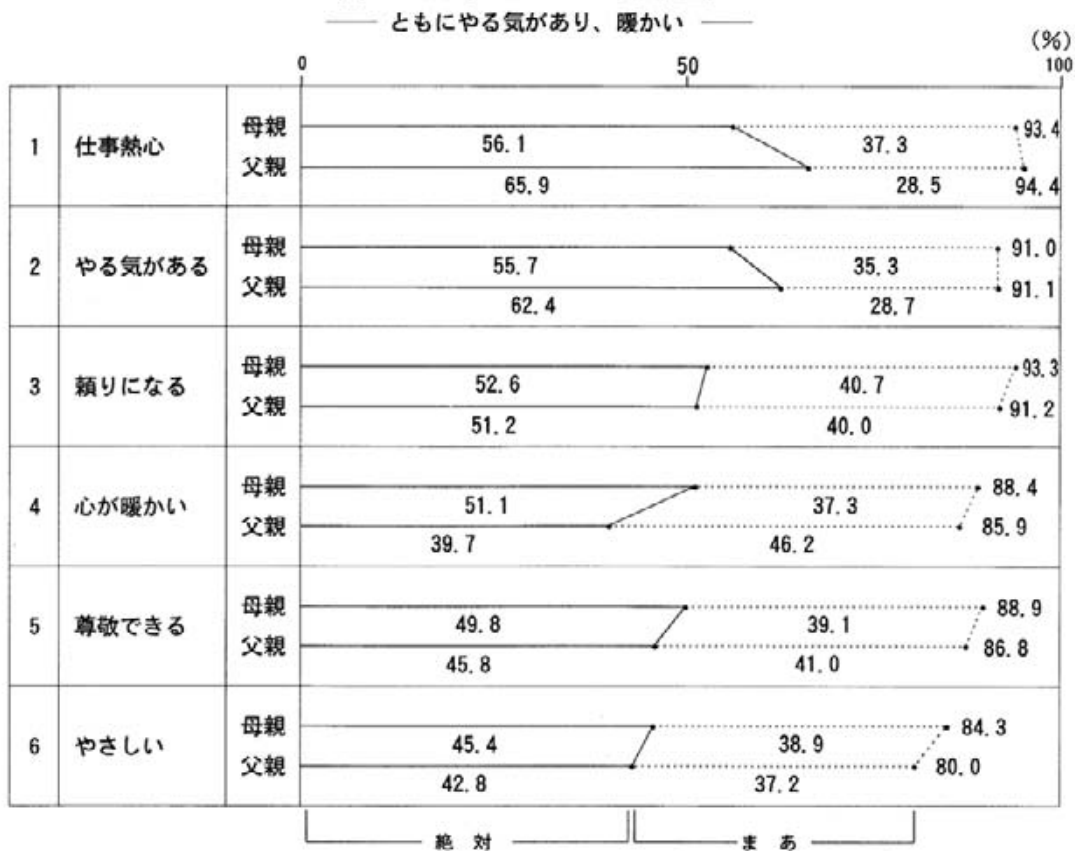
思っている事実であろう。

アメリカの社会学者のパーソンズが、『核家族と子どもの社会化』のなかで、父親の働きが社会的な達成へ向けて子どもをかりたてる「引っぱり型」——厳密には「道具的」instrumental——なのに対し、母親は家族の精神的な充足を図る「なだめ型」——「表出的」expressive——の役割を果たすと指摘している。

父性と母性とを対称の軸としてとらえるこうした見方は、ユングの「切る」と「包む」との対比のなかにも見いだされる。ユング派の精神医学者の河合隼雄は「母性社会日本の病理」で、善悪のけじめをはっきりとさせ、実力主義の原則で淘汰を図る「切る」が父性であるのに対し、母性は福祉的な発想で、差をつくり出すことなく、むしろ弱者をいたわる「包む」ところに特性を見いだせるという。

経験的に考えると、父性と母性とを対比してとらえるこうした見方に納得できるものを感じるが、日本の親子関係を調べてみると、この10年来の傾向として先の図1のように、父親と母親との差が縮小する傾向が著しい。父親と母親とはともに、やさしく暖かい上に頼りがいもあり尊敬できるという評価である。いわば、そうした同質性をふまえた上で、やさしさの度合いが強いのが母親、やる気があるのが父親という構図である。

図1 父母のタイプ (小学生)



もちろん、図1は小学生のデータなので、中学生になったら、もう少しシャープに両親をみつめている可能性が高い。そこで、中学生に両親についてのイメージを尋ねると、図2の通りとなる。共通の部分が多いが、やる気のやや多いのが父親、思いやりに富んでいるのが母親という評価である。

一昔前とくらべると、父親はやさしさを増し、それと対照的に母親は人間的にしっかりとしてきた。そうした形で、父親と母親とのイメージが接近し、いわば、父と母とが二人三脚のように、力をあわせて子育てをするパートナー型の夫婦関係が成立している。

### 第二次反抗期の遅れ

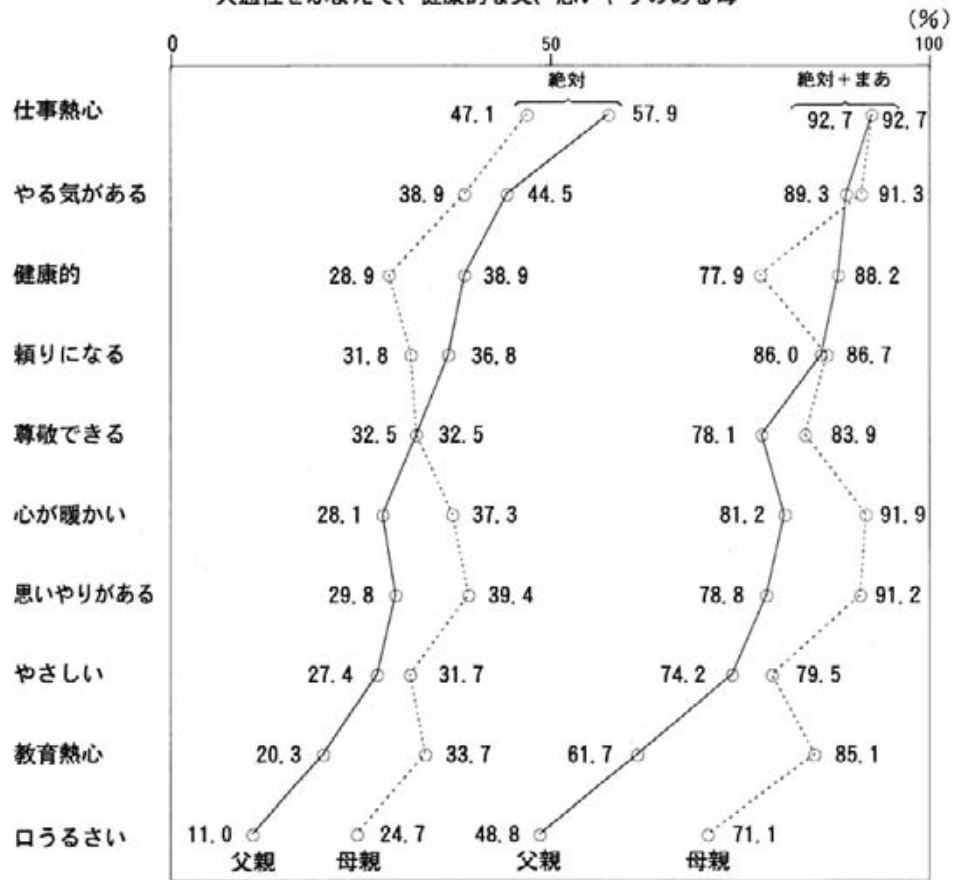
そして、こうした父親と母親との同質化はさまざまな社会的な背景のもとで成立してい

る。家制度に支えられていた父権が、戦後の民主化のなかで揺らいだ。そして、社会の民主化につれ、家庭のなかで父親のみが権威をもつ形が崩れてきた。さらに、男女共通の教育を受けた世代が親となるようになり、同一学歴をもつ夫婦が増加している。それと同時に、仕事をもつ母親もふえ、収入をもたらすのが父親のみと限られなくなった。情報化社会が到来し、家庭のなかにも世の中の動きがわかるようになり、母親の情報量が増加している。そして、生涯学習の気運は母親たちの知的な水準を向上させたなどが、その一例であろう。

そして、こうした傾向はこれから先、強まることはあっても、減少する可能性は少ない。そうだとしたら、父親と母親との同質化も、これから先ますますすすんでいくと考えられ

図2 父・母のイメージ (中学生)

共通性をふまえて、健康的な父、思いやりのある母



る。

もちろん、父親と母親の同質化は、親子関係にさまざまな意味をもってこよう。たとえば、中学生に親たちの助言がどれくらい役立つかを尋ねてみると、表4のような数値が得られる。

中学生になっても、子どもたちは、父親はむろんのこと母親からも、卒業後の進路やつとめ先などについて、「とても」あるいは「かなり」役立つ助言が得られると思っている。もちろん、これまでの発達理論によれば、中学生は第二次反抗期のまっただ中で、親のアドバイスなどに耳を傾ける年頃ではない。

しかし、現代の子どもたちは、親のアドバイスは役立つと答えている。たしかに表5からも明らかなように、中学生、そして、高校

生も、両親との関係は「とても」あるいは「かなり」うまくいっていると答えており、「うまくいっていない」のは1割を上回る程度にすぎない。

かつての子どもたちが、親の胸を借りて、嵐のような反抗を重ね成長していったとするなら、現代の子どもたちは中学生になっても高校生でも反抗のきざしを見せない。そして12~13歳から25歳くらいにかけて、10年以上の歳月を費やし、なだらかな反抗を展開していく。

あらためてふれるまでもなく、第二次反抗期は、親に依存していた子どもが親から自立する過程で示す一種の不適應現象で、これは子どもが自立をするために避けて通れない発達課題といわれていた。

表4 助言は役立つか(中学生)

— 父はむろん、母の助言も役立つ —

(%)

		役立つ			やや 役立つ	役立つ ない		
		とても	かなり	小計		あまり	まったく	小計
父親の助言	部活動をやめる	15.2	20.0	35.2	(30.9)	23.9	10.0	33.9
	勉強の仕方がわからない	21.5	18.4	39.9	(26.5)	22.4	11.2	33.6
	進学高校を決める	24.0	(30.7)	54.7	29.5	11.0	4.8	15.8
	卒業後の進路	27.3	(31.4)	58.7	27.5	9.2	4.6	13.8
	つとめ先を決める	31.5	(32.5)	64.0	24.2	8.0	3.8	11.8
	結婚相手を決める	13.0	18.5	31.5	(32.8)	23.1	12.6	35.7
	母親の助言	部活動をやめる	21.7	26.6	48.3	(30.2)	14.7	6.8
勉強の仕方がわからない	16.2	20.5	36.7	(31.4)	23.3	8.6	31.9	
進学高校を決める	27.1	(32.8)	59.9	30.6	7.0	2.5	9.5	
卒業後の進路	26.6	(34.2)	60.8	29.1	7.0	3.1	10.1	
つとめ先を決める	27.1	(30.8)	57.9	29.9	9.5	2.7	12.2	
結婚相手を決める	22.0	23.5	45.5	(30.5)	15.7	8.3	24.0	

○ = 最頻値

表5 両親との関係(中学生と高校生との対比)

— 「とても・かなり」うまくいっているが半数 —

(%)

		うまくいっている			うまくいっていない		
		とても	かなり	やや	やや	あまり	ぜんぜん
中学生	父親	28.0	26.5	32.0	5.7	4.1	3.7
	母親	33.6	30.5	28.7	4.5	1.2	1.5
高校生	父親	19.0	28.8	35.7	7.4	5.7	3.4
	母親	24.9	34.5	32.9	4.7	1.5	1.5

そうだとすると、第二次反抗期の遅れは、決して望ましい傾向でなく、子どもたちの心理的な成長がそれだけ遅れている証といえなくもない。

### 依存から自立へ

すでにふれたように、かつての親とくらべると現代の父親は人間味を増し、そして、母親は知的な雰囲気を持たせようとしている。したがって、子どもからすると、父親に反発する必要が少なくなるし、母親を軽視する気持ちも薄れてくる。そして、暖かく尊敬できる上に頼りがいがある。その結果、皮肉なことに、親に反抗することなく、いわば親に依存したままの状況で、子どもたちが成長していく。

たしかに図3のように、子どもたちは親に対して、教養もあり意欲に富んでいると評価している。したがって、子どもにとって親はビッグな存在で、とても越えにくいのであろう。

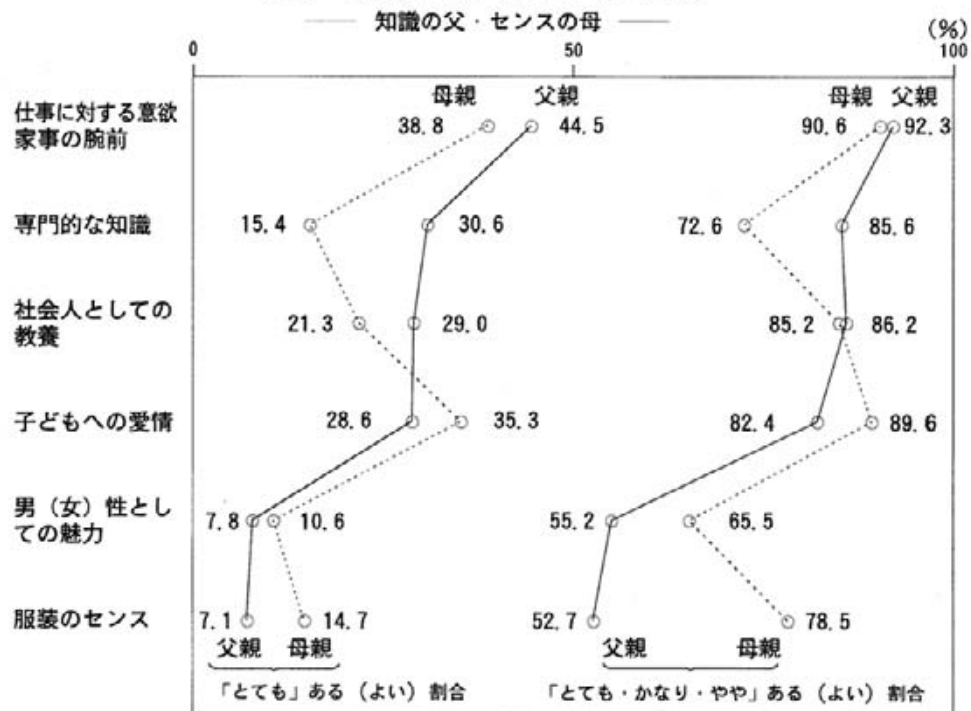
図4は、親を越えたと思うかどうかを、中

学生と高校生とに尋ねた結果を対比する形で示した結果である。

さすがに、中学生から高校生になるにつれて、親を越えたと思う割合が増加している。しかし、そうした変化は、数学や英語などの学力か体力に限られ、その他の面では、高校生になっても、親を越えられないと思っている子が多い。「人とのつき合い方」や「社会常識」「がんばる力」などで、親を越えたと思っているのは少数の例外的な子どもにすぎない。

しっかりとした親がふえてきたことは望ましい傾向であろう。すでにふれたようなアメリカの家庭などをイメージにおくと、日本の子どもたちが家庭のなかで安心して成長していける姿はすばらしいと思う。そして、日本の家庭が、子どもたちを依存させる機能を十分に果たしているのはすでに指摘した通りだが、依存から自立へのスイッチの切り換えがスムーズにすすまず、子どもたちの心理的な

図3 両親に対する評価（中学生）





自立が遅れている。

表6は、中学生たちに自分の身のまわりのことをどれくらいしているのかを尋ねたものだが、この結果によると、子どもたちが自分でしているのは「机の上のかたづけ」くらいで、その他のことはほとんど親まかせの生活を送っている。さらに、表7によると「テレビばかり見ていないで」あるいは「机のまわりをきちんとかたづけて」「言葉づかいをていねいに」などと親から言われている中学生が少なくない。

現代の子どもたちは善良でよい子どもたち

だが、子どもとしての活気や意欲に乏しい。善良な子どもを育てるのが子育ての目的とするのなら、目標はかなったことになる。しかし、ゴールにたどりついたように見えて、また新しい問題が生じてきたのが、現代の親子関係であろう。

なお、図5によると、親を越えられるかについて、高学歴の専門職の親をもつと、親を越えにくいという。皮肉なことに、親がしっかりしていると、親から自立しにくい。そうしたところにも、現代の親子関係の新しい問題が潜んでいるといえよう。

図4 親を越えられるか（中学生と高校生との対比）

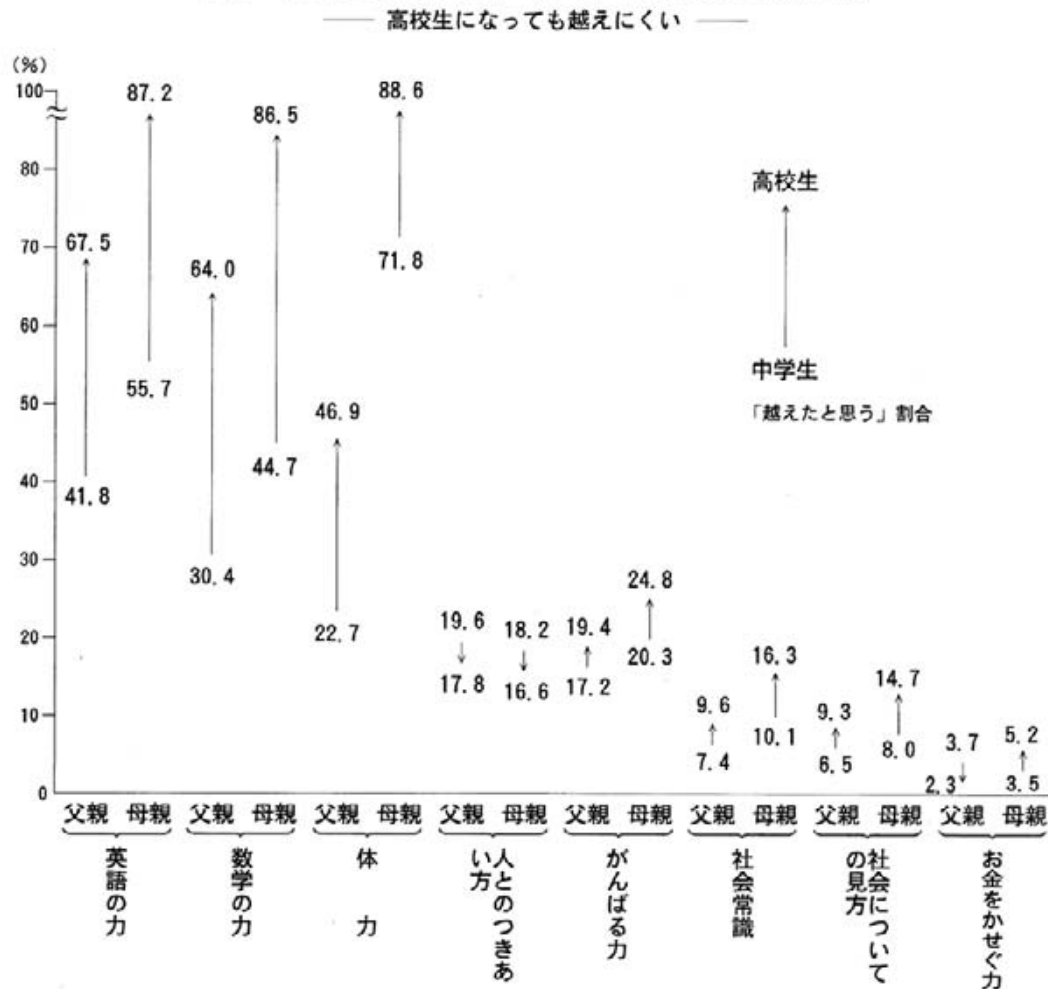


表6 身のまわりの生活習慣（中学生）

— 自分するのは机の上のかたづけをするくらい —

(%)

	いつも親	ほとんど親	ほとんど自分	いつも自分
焼魚の身をむしること	4.5	4.9	11.0	79.6
机の上のかたづけ	0.8	8.3	26.6	64.3
耳の穴のそうじ	16.0	14.2	16.4	53.4
部屋のそうじ	7.8	26.8	34.3	31.1
自分の食器のあとかたづけ	23.6	38.4	15.2	22.8
制服の手入れ	41.2	28.1	15.2	15.5
ふとんを干すこと	41.7	33.7	13.2	11.4
運動着の洗たく	58.2	26.4	7.9	7.5
下着の洗たく	59.6	26.6	7.4	6.4

○ = 最頻値

表7 何歳まで注意されたか（中学生）

— 今も、言われている —

(%)

	言われていない（何歳まで言われた）				今も 言われて いる
	小1～2まで	小3～4まで	小5～6まで	中1まで	
友だちと仲よく	41.8	22.6	14.7	5.5	15.4
危ないことをやめて	26.8	24.7	22.9	7.5	18.1
人にあいさつをしなさい	27.3	23.8	20.6	8.7	19.6
物を大切に	19.7	20.8	23.1	7.8	28.6
先生の言うことを聞く	18.8	19.5	21.2	10.4	30.1
忘れ物をしないように	14.0	20.6	22.4	10.6	32.4
朝早く起きなさい	14.8	17.1	16.3	7.0	44.8
言葉づかいに気をつけて	14.9	13.2	19.4	10.9	41.6
机のまわりをきちんと	11.5	13.7	21.4	11.1	42.3
テレビばかり見ていないで	9.6	10.3	19.9	11.1	49.1

○ = 最頻値

図5 親を越えられるか  
— 高学歴の親を越えにくい —





〔調査レポート〕

# しつけ

東京学芸大学教授 深谷和子  
文教大学女子短期大学部助教授 石川洋子



# 調査レポート しつけ 要約

1. 母親の教育力の低下がしばしば指摘される中で、幼児をもつ母親のしつけは、言われているほどいい加減なのだろうか。小学生のしつけが家庭で十分に行われていないという声の中で、子どもたちが幼児期にどのようなしつけを受けてきたかを、幼児をもつ母親の特性と共に明らかにしようとする。



2. 調査対象となった母親は1,572名、30代の母親が75%を占める。全体の88%が幼稚園児（他は保育園児）であったため、専業主婦が69%、大卒以上が17%とやや高学歴。一戸建て居住者は36%。都市に住む母親のしつけの姿を調査したことになる。（表1・2・3・4）

全体の6割が子ども2人家庭であるが、子ども3人家庭も2割ある。（図1）



3. 主婦として母親としての仕事のうちで最も好まれているのは洗濯（「とても好き」が39%）だが、子育ては掃除や料理より好まれている。（図2）

4. 3人以上子どもがほしいと思っている母親が全体の6割に達し、また子どもが好きかどうか（わが子を離れて）では、「とても好き」が10%、「わりと好き」が36%で、合わせて半数には達しない。「好きでない」と否定する者も24%いる。（図3・4）

5. 自分の性別（女性）を受容している者は全体の4分の3にも達するが（図5）、主婦役割はあまり好まれておらず、「家事がめんどろ」（「とても・まあそう」を合わせて）な者が52%、「夫の世話が負担」な者が28%にも達する。また、「子育てがめんどろ」な者も33%いる。（図6）



6. 母親のしつけの実際を探るために、11の日常的なしつけ場面を設定し、それぞれにどう対応するか、いくつかのパターンのうちから選択させた（文中に表）。いわゆる厳しいしつけとみてよいものは、就寝、他のおとなにバカと言ったとき、スーパーからのガム無断持ちかえり、くらいで、他は一応吐いたりしつけようとしているものの、子どもの気持ちへの対応をも加えた方法であり、しつけの実効が十分でない可能性が大きい。

7. 年齢の上昇に対応してしつけのパターンを変えていくことが十分できていない（図8）。父親については一層態度の変化が少ない。子どもの性別によっても、母親の学歴によっても、しつけの差はほとんどみられない。（表5、図9）

## 調査レポート／しつけ

### 要約

8. 一番しつけのパターンの差があったのは、母親が「子育て好き（図2）」かどうかの特性である。子育て好きの母親はしつけ場面で「叱る」などのこまめな対応をしているが、子育てが嫌いな母親はしつけず放任する傾向がみられる。（表6）

9. 母親のしつけを他の人びとと比較させてみると、半数は他人と同じくらいと考えており、「他人より厳しい」が4割、「甘い」はわずか1割。全体に、他人と同じくらいか、むしろ厳しくしつけていると思っている（図11）。夫については自分より「厳しい」が28%、「甘い」が36%。厳しい父親は少なくなったが、言われているほど父親の甘さに手を焼いている気配はない。（図12）



10. 昔のしつけと今のしつけについてみると、姑も実母も自分が今子どもをしつけているより「甘かった」と答える者が4～5割で、すでにこの世代の母親の親たちは、明治の母親のイメージにあるように、子どもを厳しくきちんとしつけた世代ではないことがわかる。（図13）



### ●調査概要

1. 調査主題 しつけ
2. 調査視点 小学校入学以前の子どもたちがそれぞれの家庭の中でどんなしつけ、家庭教育を受けているのか、現代の母親のし

つけの実態を明らかにすることにより探っていく。

3. 調査項目 同じしつけ場面に対して自分なら、自分の母親（昔）なら、夫ならどのようなしつけをするか。家事や育児のうちで自信があるのは何か、など。



11. 同じしつけ場面を、「自分なら、実母なら（昔）、夫なら」とたずねた結果では、場面によって、しつけ方に差がみられる（図14）。母親が厳しいのは社会的場面でのしつけで、偏食に甘いのはおばあちゃん。子どものしつけは食事や食べ物をめぐって行われることが多いので、2つの世代のしつけ態度の差が、実際以上に拡大されてあらわれるのであろう。



12. 地域の他人の子のしていることに対して、母親は多少叱ることもするが、父親は放任（図15）。しかしここでも子育て好きな母親は他人の子にもきちんと注意する傾向がみられる。（図16）



13. 若い頃の自己実現欲求と子育ての関連についてみると、6割弱の母親は、家庭人以外の場での自己実現欲求をもっていた人びとである。そして、学歴が上がるにつれ「育児と自己実現を両立させている」、または「今後育児が一段落したら再開するつもり」と答える者の割合がふえていく。（表8・9）

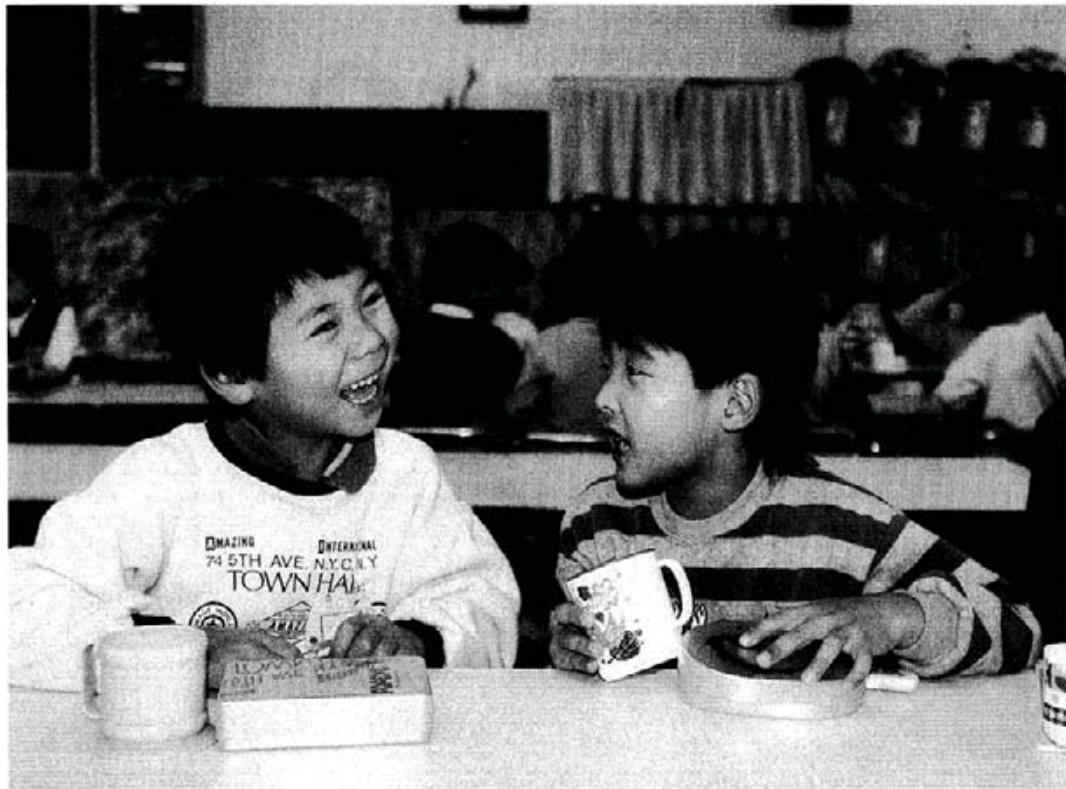
また、子育てが好きでない母親ほど、もともと育児以外の自己実現欲求が少ない傾向にある。子育てが好きな母親は、子育て好きであるだけでなく、他に自己実現の欲求をもっており、いったんそれへの努力を中断するにせよ、人生で育児ともう一つの自己実現を果たしているとしており、「育児好き」な者は単なる女性役割の受容者ではなく、意欲的積極的な人びとで、人格の成熟性も高いのかもしれない。（表11）

4. 調査時期 1992年7月  
 5. 調査対象 東京、神奈川、埼玉に住む幼稚園児、保育園児の母親  
 6. 調査方法 幼稚園・保育所通しの質問紙調査

7. サンプル数（母親） (人)

就園/性	男児	女児	計
幼稚園	676	682	1,358
保育園	129	85	214
計	805	767	1,572

# 1. はじめに



家庭の教育力の低下が折にふれて指摘されている。とりわけ母親の子育て能力の低下が言い立てられている。しかし昔から母親1人で子育てに当たっていた時代などありはしなかった。母親共々複数のおとなたち、時には年長の子どもたちまで加わって、家族ぐるみ、地域ぐるみで子どもは育てられていたのである。最近のように家族のサイズが小さくなり、都市化による地域の消失によって、子どもをとりまく人びとの数は減少する一方で、それが全体としての教育力の低下につながっているのではなかろうか。

逆にたった1人で、夫の協力も家族の協力も、そして近隣の人びとの協力も得られずに子育てをしていかなければならない母親たちの大変さに人びとは気づいているだろうか。育児不安がそこに生まれてくる。子育ては生みの母親だけが担当すればよい行為ではなく、多くの社会的支援が必要だと言われるゆえん

はここにある。

「モノグラフ・小学生ナウ」は、これまで主として小学生やその親を対象に行われた調査で構成される調査レポートとして刊行されてきた。しかし小学生は、それ以前に幼児期に受けたしつけによって成長し、入学してきた者たちである。それぞれが当然、幼児期の育ちをひきずっているのである。

子どもたちがそれぞれの家庭の中でどんなしつけ、家庭教育を受けてきたか。しかし一口に家庭と言っても、一歩その家庭の中に入れば、実にさまざまな違いがある。それぞれの家庭のもつ雰囲気、夫婦関係、経済状態や価値観から、親子の親密さや信頼度、そして個人の性格にいたるまで、実にさまざまな顔があり、そこから生み出される「しつけ」は100の家庭があれば100通り。しかもその詳細はちょっとやそっとではうかがい知ることができない。

そこで本レポートは、母親のしているしつけを、できるだけ具体的に聞き出す工夫をした質問項目を用いて、現代の母親のしつけの実態を明らかにすることを試みたものである。しつけができないとする最近の母親への風当たりは、果たして的を射たものだろうか。

調査対象は、首都圏にある幼稚園6園、保育所3園の幼稚園児、保育園児をもつ母親、1,572名。調査方法は質問紙調査法であり、幼稚園や保育所を通して、調査票の配布、回収を行った。調査時期は、1992年7月、回収

率は65%であった。

なお、調査対象とした母親とその子どもたちの属性は幼稚園児が全体の88%で、また母親の年齢は、30代の者が全体の75%を占めている(表1)。幼稚園児が多かったため、母親の職業は専業主婦が7割(表2)で、学歴は表3に示す通り、大卒以上が17%とやや高学歴傾向の層である。また調査地域の特色を反映して、アパート・マンション住まいが5割を超える(表4)。子ども数は図1に示した通り、2人が6割となっている。

表1 母親の年齢

(%)					
20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳	40~44歳	45歳以上
1.3	15.1	43.8	31.4	7.4	1.0

表2 母親の職業

(%)				
専業主婦	フルタイム	パートタイム	自営業	その他
69.0	4.4	12.8	7.1	6.7

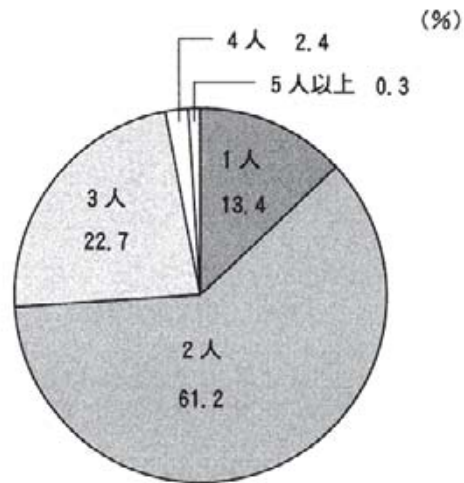
表3 母親の学歴

(%)			
中卒	高卒	短大卒	大卒以上
3.3	45.9	33.4	17.4

表4 住居

(%)		
一戸建て	社宅	アパート・マンション
35.5	12.2	52.3

図1 子ども数



## 2. 幼児の母親とは



### ●子育てが好きか)))

最初に、現代の幼児をもつ母親たちのアウトラインを探ってみよう。約70%の者が専業主婦であったが、母親たちは現在の自分の立場や子育てなどをどのように感じているのだろうか。

図2は、主婦として母親としての役割を好きかどうかたずねたものである。「とても好き」とその筆頭にあげられたものが洗濯、次いで子育て、掃除と続いている。昨今の母親たちのきれい好きがうかがわれる結果であるが、子育ても「とても好き」が21%、これに「少し好き」を加えると、80%の者が子育ては好きだと答えている。しかし少数ではあるが、子育ては「ぜんぜん好きでない」母親が2%、「あまり好きでない」者が19%いるこ

とも目を向けておく必要があるだろう。この母親たちの育児はどのような質のものか。どんな子育て支援が必要か、明らかにしたいところである。

次に、もっと直接に「子どもは何人ほしいか」たずねてみると、図3に示したように「3人」が最も多く48%、「4人以上」も12%いる。逆に「1人でよい」4%という数字もあり、母親といっても、子ども好きの程度には違いがあることがわかる。

では、わが子を離れて「子ども一般」についてはどうか。むしろこのほうに本音があるのではなかろうか。母親として「わが子が好きでない」「(現在している)子育てが好きでない」とは言いにくいものがあるからだ。

図4によると、「子ども（一般）をとっても好き」な者は10%。「少し好き」という気のない返事をする者は、実はあまり子ども好きではないと解釈したほうがよさそうだから、「わりと好き」までを合わせると46%。本当

の「子ども好き」な母親は意外に少ないことがわかる。子どもはあまり好きでないが、わが子だから可愛い、好き、という母親のほうが多数派なのかもしれない。

図2 家庭の中で好きなこと

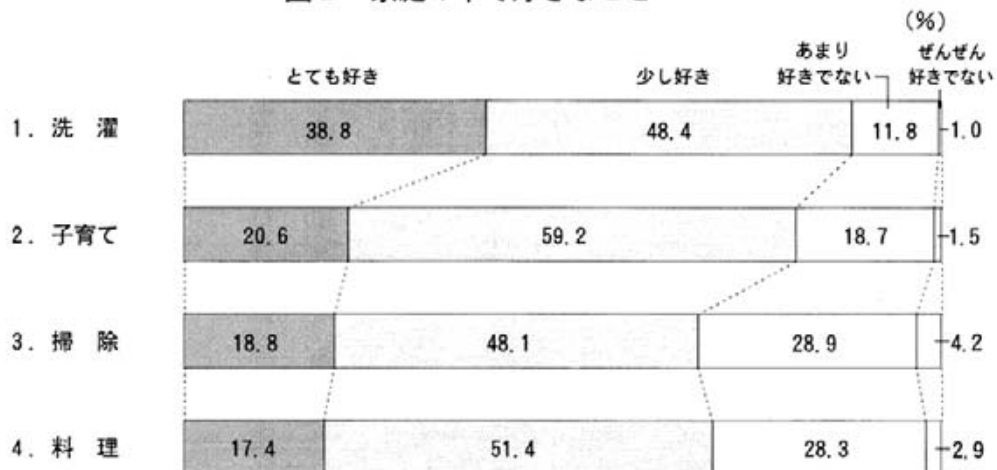


図3 できれば子どもは何人ほしいか

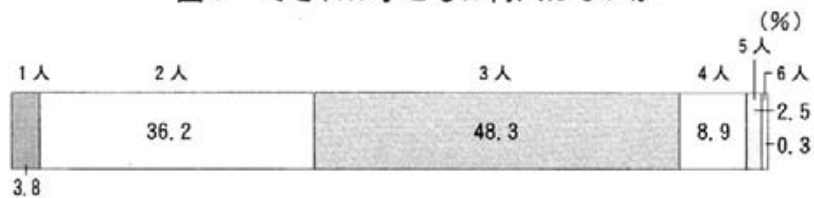
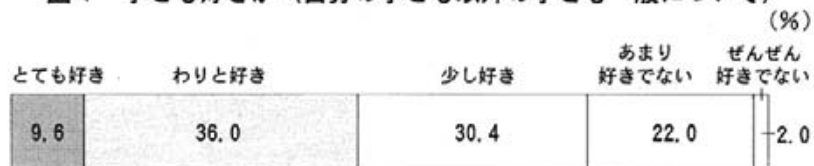


図4 子ども好きか（自分の子ども以外の子ども一般について）



## ●母親として主婦として)))

ここでもう少し目を転じて、母親たちが家庭での主婦役割や母親役割をどう受けとめているか、また女性役割をどう受けとめているか見てみよう。

図5は「生まれ変われるとしたら、男性に生まれたいか、女性に生まれたいか」をたずねた結果である。「男性に」は「絶対に・できれば」を合わせて26%、「女性に」は74%で、「絶対女性に」とする強固な女性役割の受容者は23%と多くはないが、「できれば」

を含めると、全体の4分の3が女性であることを好み、受け入れている。

しかし図6に示したように、母親役割や主婦役割の詳細について見てみると、家庭内での役割分担にはそれほど積極性を示していないのが特徴である。図6が示すように、家事がめんどろな者は「とても・まあ」を合わせると52%もあり、子育てがめんどろな者も33%、夫の世話が負担28%と、母親の中には家庭内での母親・妻役割を負担に感じている者

図5 生まれ変わるとしたら

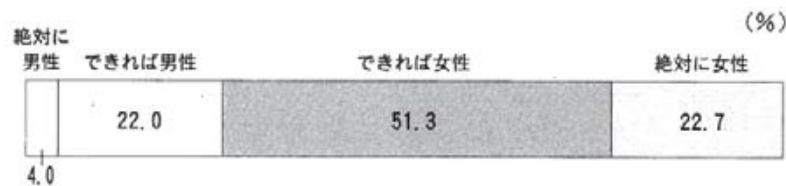


図6 母親役割・主婦役割について



が少なくないことがわかる。図7に示したように、夫は「まあ」も含めると6割近くが子育てに一応の協力をしている様子である。それにしても図6に見られるように、家事ほどに負担感はないものの、3割を超す母親が育

児に集中できない様子が見てとれる。

しかし、女性がまた母親が、全て子ども好きで、母親や主婦役割を好んで果たしているはずもない。母性神話を実際にあるものとして信ずる人は現代ではもう稀だろう。

図7 子育てに夫の協力が得られるか

					(%)
とてもそう	まあそう	どちらとも いえない	あまり そうでない	全く そうでない	
21.1	36.8	18.8	16.7	5.8	その人が いない 0.8



### 3. しつけの実際



以上見てきたような心の構えの下で、母親たちは日々どのようなしつけをしているのだろう。しつけのポリシーや子ども観が表れそ

うな場面を11場面設定して、それぞれに3から4の選択肢を用意し、自分の日常に最も近いしつけの仕方を探ってみた。

#### ●就寝

(数字は%、以下同)

##### ① 寝る時間がきても、お子さんがおもちゃで遊んでいるとき

- 0.9 1. 叱らずに、眠くなるまでそのまま遊ばせておく
- 34.9 2. とくどき「寝なさい」と叱るが、無理に布団(ベッド)に入れることまではしない
- 60.0 3. 決められた時間がくれば、とにかく布団(ベッド)に入れる
- 4.2 4. その他( )

「食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔」はいわゆる基本的な生活習慣と名づけられて、幼稚園や保育所ではその習慣形成にかなりの努力が払われている。では母親側はどうか。この中から「睡眠」に関するしつけ場面を設定し

てみた。

早寝早起きは、人間の生活リズムの中で基本的に重要なものであろう。日が沈んだら寝る。日が昇ったら起きる。これが自然の一部であるヒトという生物体が一番ふさわしい生

活リズムであることは確かだろう。しかし最近では夜型人間がふえてきて、子どもまでがその傾向にあると言われる。事実帰宅の遅い父親に合わせるかのように、夜10時から12時に近い就寝をしている幼児が少なくないことなどもしばしば報告されており、朝の起床時間が遅いために朝食を抜いたり、午前中はボーッとしたまま過ごしてしまうなど、一日

の生活のリズムが乱れることを問題視する保母さんも多い。

上記のデータを見ると、寝る時間がくれば、とにかくベッドに入れてしまう母親が60%、無理強いほしない母親が36%となっている。しつけとしてどちらがいいかは、ケース・バイ・ケースだろう。

## ● 偏食

### ② お子さんが肉や野菜など、嫌いなものをいつも残すとき

- 18.1 1. 無理に強制しない
- 71.5 2. 少し食べれば、許してあげる
- 3.2 3. きつく吐ってでも、必ず全部食べさせる
- 7.2 4. その他 ( )

昔の母親はとかく偏食に関して厳しかった。しつけがゆるやかになってきたと言われる今、母親は偏食をどう扱っているのだろう。

結果を見ると、嫌いなものを残しても、「少し食べれば、許してあげる」母親が72%を占めており、「きつく吐って必ず食べさせる」者はわずかに3%にすぎない。

最近の育児書でも、好き嫌いについてはあ

まり厳しいしつけの記述は見られず、「他の食品で代替できればよい」とするものがほとんどである。食糧事情もよく、食品数も数多く作れるようになったことの反映かもしれない。「少し食べれば許す」(72%)がしつけとしてはまあ妥当なところだろうが、「強制しない」(18%)は果たしてこのままでいいものか、気になるところである。

## ● 着替え

### ③ お子さんが朝起きて、ねまきのままでなかなか着替えようとしないとき

- 33.0 1. とくに急がないときは、そのままにさせておく
- 54.1 2. とくに急がないときでも、着替えるように何度でも根気よく言う
- 6.7 3. とくに急がないときでも、ねまきのままでいることを許さない
- 6.2 4. その他 ( )

これもしつけとしては2「何度でも根気よく言う」か、または3「ねまきのままでいることを許さない」が妥当なところだろう。筆者なら3である。1「とくに急がないときは、

そのままにさせておく」(33%)はしつけを忘れていた母親ではなかろうか。

着替えは1~2歳までは自分でさせようとしてもかえって手がかかってしまう。本サン

ブルは3歳をすぎた者がほぼ100%であり、自分で脱ぎ着ができる発達段階にきているこ

とを考えると、全体としてしつけが甘すぎる感じがする。

## ●後片づけ

### ④ 遊んだおもちゃを片づけようとしないうち

- |      |    |                                 |   |
|------|----|---------------------------------|---|
| 11.0 | 1. | たいていおとなが片づけてしまう                 |   |
| 75.7 | 2. | 少し手伝ったりしても、大部分は本人に片づけさせる        |   |
| 10.0 | 3. | とにかく最後まで1人で全部片づけさせる(親は絶対手を出さない) |   |
| 3.3  | 4. | その他( )                          | ) |

3歳をすぎると、ふつう親も幼稚園や保育所の保育者も後片づけの習慣づけを意識して教え始める。母親の中には厳しく片づけさせる者もいるようだが、集団保育の場での片づけの意味と、家庭での片づけとは少し違うようにも思われる。自分の思い通りにふるまってもよい家庭場面では、あまり整理整頓を厳しくしつけると、遊びを制限することにもなりかねない。両者の兼ね合いがむずかしいと

ころだろう。

データを見ると、「少し手伝っても大部分は本人に片づけさせる」者が76%と高い数値となっている一方、「たいていおとなが片づけてしまう」という者が11%いる。年齢との関連で見えていく必要はあるものの、これもまたしつけの甘さを示す数値とも言えるかもしれない。

## ●ケンカ

### ⑤ 1つ年上の近所の子と、おもちゃのとりあいでケンカを始めたとき

- |      |    |                                     |   |
|------|----|-------------------------------------|---|
| 49.7 | 1. | 子ども同士のことなので、ケガでもしない限りそのまましておく       |   |
| 1.6  | 2. | 相手の子に「あなたはお兄ちゃんなのだから、〇〇に貸してね」と納得させる |   |
| 33.1 | 3. | 自分の子に「ほら、こっちのおもちゃにすれば」などとがまんさせる     |   |
| 8.5  | 4. | とにかく2人とも叱って、やめさせる                   |   |
| 7.1  | 5. | その他( )                              | ) |

最近の子どもたちはケンカをしなくなったと言われる。またケンカ経験の少ないことで、ケンカの仕方を知らないとも言われている。なぜケンカが減少したか、原因は種々考えられるが、その1つは、幼児の場合、交通事情の悪化などで母親が子どもの遊びについていかなければならない現状があり、母親の目前でのケンカは他人の目を意識して止めてしま

うのかもしれない。一種の管理化の進行である。

データを見ると、年上の子に「貸してね」と言ったり、「とにかくケンカをやめさせる」という者はさすがに低くなっているが、「ケガでもしない限りそのまま」という者は50%と、半数にとどまっている。「自分の子にがまんさせる」という者も33%おり、ケンカ相手の子どもの親の手前もあり、子ども同士のケ

ンカに介入せざるを得ない母親たちの姿がうかがえる。

この場面はしつけるのではなく、ケンカさせることのほうが重要なのだが、数値が半々

に割れたのをみると、むやみにしつければいいという思い込みをしている母親の姿が見てとれる。

## ●オモチャをねだる

⑥ デパートで、おもちゃ売りのそばを通りかかったら、お子さんが1,000円くらいのおもちゃをほしがって、大声で何度もせがみました。

- |      |    |   |   |
|------|----|---|---|
| 6.6  | 1. | 1,000円くらいなら、買ってやる                               |   |
| 74.3 | 2. | 「またこんどね」「同じの持ってるでしょ」などと、なだめたり気持ちをそらせて、なんとか連れて帰る |   |
| 5.5  | 3. | 叱って、ぜんぜんとりあわない                                  |   |
| 13.6 | 4. | その他（  | ） |

1歳から2歳にかけては、いわゆる自我が芽生えるときである。この頃から盛んな自己主張が始まる。まだ社会的なルールが存在を知らないの、その自己主張はしばしばメチャクチャだ。しかしそれをどこまで「しつけ」として押さえ込み、どこまでは「自我の成長」のためにおとなのほうがかまんして認めてやるか、しつけのカンドコロが問われる場である。

この質問項目では、「1,000円」という、ふだん買い与えるおもちゃなどの値段よりは少し高めの金額を設定してみた。母親の74%は、「なだめて気持ちをそらせる」と答えており、1,000円だから「買ってやる」と答えた者はわずか7%であった。しかし、「叱って、ぜんぜんとりあわない」のが6%とは少なすぎるように思う。子どもの要求に引きずられがちな最近の母親の姿が見えてくる。

## ●歩きながら食べる

⑦ 一緒に行ったスーパーで買ったチョコレートを、帰り道で食べたいとしつこくせがんだとき（家まで少し距離があるとします）

- |      |    |                                       |   |
|------|----|---------------------------------------|---|
| 20.6 | 1. | 食べさせる                                 |   |
| 38.2 | 2. | 叱っても、まだせがんだら「今日だけ特別よ」ときちんと言ってから、食べさせる |   |
| 21.8 | 3. | 叱って、とりあわない                            |   |
| 19.4 | 4. | その他（                                  | ） |

昔の日本では、買い食いや食べ歩きはきつくいましめられたものだった。30代が75%を占める本サンプルの若い母親たちは、そのあたりをどうしつけているのだろうか。

チョコレートの食べ歩きを「叱って、とりあわない」者は22%。これに対して「食べさせる」者21%。「特別よと言ってから食べさせる」という条件つきで認める者は38%と

多く、合わせると6割近くの者が食べさせるという結果である。

先の1,000円くらいのおもちゃを買ってほしいとせがんだときには、7割強の者がなだめたりなどしながらも「買わない」と答えていたことと比べると、非常に甘い数値と言え

そうだ。また前に見た「好き嫌い」についても、「少し食べれば許してあげる」傾向が強かったことを考え合わせると、食べることについてのしつけには、多くの問題があるように思われる。

## ●電車の中で

⑧ すいている電車の中で、お子さんがうれしそうに友だちときゃっきゃと走り回っているとき

- 11.4 1. すいている場合は、少しの間ならそのまましておく  
 66.2 2. わけを十分話してやめさせ、その代わり親が話し相手になってやる  
 18.9 3. とにかく叱ってすぐやめさせ、退屈でも席に座らせておく  
 3.5 4. その他 ( )

3歳をすぎて子どもの行動半径が広がってくると、乗り物や広場など公共場面でのマナーのしつけが必要になってくる。ここでは4場面を設定して、そのしつけの仕方を見ようとした。結果をみると「すいている場合は少しの間そのまま」に、11%がそうすると答えているのには驚かされる。おとなはすいて

いるかどうかの判断ができるが、子どもはそうはいかない。また、すいていると言っても、無人ではないのだから、これはやめさせるべきであろう。1割と言えば10人に1人。最近公共場面での母親のしつけの甘さが指摘されることが多いが、1割もいれば確かにそうした母親のしつけの甘さは人目につくであろう。

## ●バカ！

⑨ お子さんが、よそのおばさんに注意されたら、「バカ！」と大声で言い返しました。あなたは

- 6.0 1. 「しょうのない子ね、すみません」などと相手にはあやまっておくが、子どもはあまり叱らない  
 12.8 2. 「なんてことを言うの、おばさんにあやまりなさい」と叱るが、お子さんが黙っていてもそのままにする  
 70.7 3. 「なんてことを言うの、おばさんにあやまりなさい」とひどく叱って、必ずあやまらせる  
 10.5 4. その他 ( )

「ひどい言葉づかいをしたとき」について育児書にはしばしば「あまりにひどいもので

ない限り、知らぬふりをしたほうがいい」と書いてあるが、親やきょうだいと他人に対す

るときでは事情が違ってくる。3歳をすぎれば、少しずつマナーすなわち他人の前での礼儀を教えたほうがいい。

「親が代わってあやまる」は6%とさすがに少ないが、「子どもを叱っても黙っていれ

ばそのまま」が13%と、他人に対するマナーのしつけをまだ始めていない母親も多いようである。前に見た電車の中を走り回る子の場合と合わせると、公共的場面のしつけにむとんちゃんな母親たちがいることがわかる。

## ●席取り

⑩ 混んだ電車に乗ったら、1つ席が空いていました。お子さんが、おとなを押しつけて駆け込んで席に座ったら

- 3.2 1. 子どものことだから、そのままにさせる  
69.8 2. 駆け込んで席を取ってはいけないことを話すが、お年寄りなどがそばにいないければ、そのまま座らせておく  
22.9 3. 「だめよ、立っていなさい」と言って、立たせる  
4.1 4. その他( )

公共的な場面でのしつけの3つめは、電車での席取りである。子どものマナーの悪さを子どもだからと注意しない親が3%。紙上だから多少抑制がきくはずだが、それでも3%

の母親が「注意しない」と答えているのに少し驚く。逆に「立っていなさい」と立たせる者は23%。このあたりの数値はまあまあというところかもしれない。

## ●万引き

⑪ 家に帰ったら、スーパーからお子さんがガムを持ってきたことに気がつきました。(仮定)

- 4.9 1. 「だめよ、黙って持ってきては」と一応叱るが、それ以上のことはしない  
24.9 2. 「あとでお母さんが返しておくから、今度から絶対にしないのよ」と叱って、あとで母親が返す  
65.0 3. きつく叱って、「お母さんと返しにいこうね」とスーパーに連れていき、子どもをお店の人にあやませる  
5.2 4. その他( )

公共のルールに反する場合の最後に、「万引き」に当たる行為を設定してみた。もちろん幼児には「盗む」という意識はないのだろうが、行為自体の社会的意味をよく教えるべき場面であろう。それに、この質問項目のような場面は全くあり得ないことでもないと思

われる。

母親たちはこうした(社会的には)重大な行為が起きたときにどうするか。

「叱るだけ」の者はさすがに低く5%。逆にきつく叱ってスーパーに連れていき、「本人にあやませる」者は65%と高い数値となって

いる。しかし一応叱るが、「母親が返しに行く」者も25%。母親が返しに行くのであれば、子どもにとっては、ほしかったガムだけを取り上げられたという結果が残るだけであり、お金を払わずに持ってきてはいけないことへの理解にはつながりにくい。

しかし、2がいいか、3がいいかについては子どもの年齢や性格によっても、決まってくるだろう。それにしてもこの項目だけが他より群を抜いて「厳しい」対応のみられるのが面白い。しつけの甘い母親たちが、一番キリッとなる場面のようなようである。

## 4. 性差と年齢差をめぐって



### ●子どもの性別で)))

子どもたちは3歳前後から「男」「女」という人間の種類を理解しはじめ、母親の会話の中にも、「男なんだから」「女なんだから」という言葉が聞かれるようになる。しかし、実際にしつけの場面で、母親たちは子どもの性別を意識しているのだろうか。

表5は、先の11項目について、子どもの性別による違いを見ようとしたものだが、全体として性別による違いはほとんど見られない。

5「おもちゃのとりあいのケンカ」が、「そのままにしておく」で男の子の母親が52%、女の子の母親が48%、「自分の子にがまんさせる」で男の子31%、女の子35%と男の子にややゆるやかなしつけがみられる程度である。幼児の場合、子どもの性別を意識したしつけはまだほとんどないか、あってもごく一部にすぎないと思われる。



表5 しつけ × 性

(数値は4～8歳児のみ)

## 1. 寝る時間でも遊んでいるとき

(%)

	そのまま	強制しない	布団に入れる	その他
男児	0.7	35.5	58.5	5.3
女児	0.8	36.2	59.6	3.4

## 2. 嫌いなものを残すとき

(%)

	強制しない	少し食べれば 許す	必ず全部 食べさせる	その他
男児	19.1	70.1	3.6	7.2
女児	16.3	73.6	2.8	7.3

## 3. 朝なかなか着替えようとしないうとき

(%)

	そのまま	何度も言う	許さない	その他
男児	33.1	54.3	6.2	6.4
女児	32.1	55.7	6.4	5.8

## 4. 遊んだおもちゃを片づけようとしないうとき

(%)

	おとなが片づけ てしまう	大部分本人に 片づけさせる	1人で全部 片づけさせる	その他
男児	11.0	76.0	9.9	3.1
女児	10.8	75.4	10.8	3.0

5. 1つ年上の子とおもちゃのとりあいでケンカを始めたとき

(%)

	そのまま	相手の子に貸してねと納得させる	自分の子にがまんさせる	やめさせる	その他
男 児	52.3	1.2	31.1	8.1	7.3
女 児	47.5	1.6	35.1	8.5	7.3

6. デパートで1000円くらいのおもちゃをせがんだとき

(%)

	買ってやる	なだめたり気をそらす	叱る	その他
男 児	5.0	77.2	4.7	13.1
女 児	7.9	72.2	6.0	13.9

7. 買ったチョコレートを帰り道で食べたいとせがんだとき

(%)

	食べさせる	特別よと言う	叱ってとりあわない	その他
男 児	21.5	38.3	20.0	20.2
女 児	19.5	38.1	23.3	19.1

8. すいている電車の中で友だちと走り回っているとき

(%)

	そのまま	親が話し相手になる	叱って座らせておく	その他
男 児	9.8	64.9	21.2	4.1
女 児	11.3	67.1	18.9	2.7

## 9. よそのおばさんに注意されて「バカ」と言い返したとき

(%)

	親があやまる	子どもが黙っていてもそのまま	必ずあやまらせる	その他
男児	5.7	12.6	70.5	11.2
女児	6.3	12.9	69.2	11.6

## 10. 電車で席が空いていたら、おとなを押しつけて座ったとき

(%)

	そのまま	お年寄りがいなければそのまま	立たせる	その他
男児	3.2	72.0	21.2	3.6
女児	2.7	68.5	24.0	4.8

## 11. スーパーからガムを持ってきたことに気づいたとき

(%)

	一応吐るだけ	母親が返す	あやまらせる	その他
男児	4.5	24.7	65.7	5.1
女児	4.6	24.1	65.5	5.8

## ●年齢としつけ)))

一口に幼児と言っても、体力や技能、精神発達の年齢による違いは大きい。1歳半から2歳代にかけては、子どもの自己主張の激しくなる時期であり、言葉がある程度話せるようになることと相まって、基本的な生活習慣のしつけに母親が一番手を焼く時期である。

3歳になると行動範囲も広がり、社会的なしつけも始めなければならなくなってくる。しかし親の言うことを聞きたくないという独立心が強い一方で、まだ十分にできないことも多く、依存心も強い時期である。なぜ叱るかというしつけの理由もまだ十分には理解できないので、説明に困ることも多い。また子どもによる違い、つまり、しつけのしやすい子とにくい子の違いも明らかになってくる時期である。

4歳になると、ある程度自己規制ができるようになり、がまんもできるようになる。想像力なども豊かになり周囲への関心も強まるが、言葉の上達と共に、母親のしつけの矛盾をついたり、いわゆる「へ理屈」も多くなる。

5歳になると、情緒的にもだいたい落ちつきを見せ、ルールも理解し、言葉での表現も聞きとりも上手になってくる。親もしつけがしやすくなったことを感じる年齢だ。

だから育児書と呼ばれるものは、「〇歳児のしつけ」のように年齢ごとに区切った解説の仕方をしており、それぞれの年齢段階によってしつけの仕方も変えていくことが、上手なしつけだと母親に教えている。

しかし、実際のしつけの場面でこうした年齢への対応はできているのだろうか。

図8は、年齢差を3歳、4歳、5～8歳の3段階に分けてみたものである。図を見ると、ここでも年齢による母親の対応の違いはごく

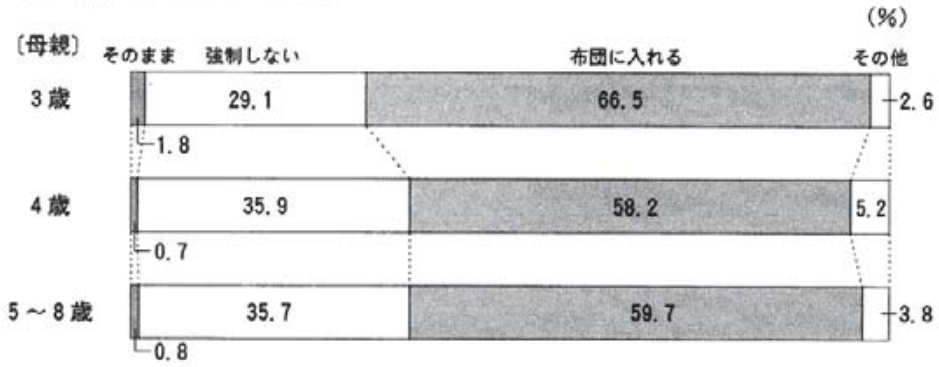
わずかである。かろうじて1「寝る時間がきても遊んでいるとき」に、「決められた時間がくれば布団に入れる」が3歳児で67%だったのが、4歳で58%へと子どもの意志を尊重する方向へ、また2「嫌いなものを残すとき」に「強制しない」が4歳児で20%だったのが5～8歳で16%にへってきており、3「朝なかなか着替えようとしないうち」、4「遊んだおもちゃを片づけようとしないうち」、8「電車で走り回っているとき」、11「スーパーからガムを持ってきたとき」等で「そのままにさせておく（11では軽く叱るだけ）」という割合が年齢と共に多少減少しているだけで、しかもその変化はごくわずかである。つまり「夜早く寝ない」というおとな型への生活リズムは4歳になると尊重する傾向がでてくるが、それ以外では、いくつかの項目で年齢と共に多少「しつける」意図で子どもを「そのままにしておく」態度はへるものの、その変化はごくわずかである。

母親は子どもが生まれてからずっとその成長につきあっているわけであり、子どもの成長にしつけ態度を対応させることのむずかしさはわかるものの、こうした対応ができないようでは、その内容の詳細は別として、しつけ手として十分な役割を果たしているとは言えないだろう。基本的な生活習慣のしつけにせよ、マナーや社会的ルールのしつけにせよ、年齢によって何を叱り何を許容するか、その対象も方法も当然違ってこなければならないはずだからである。

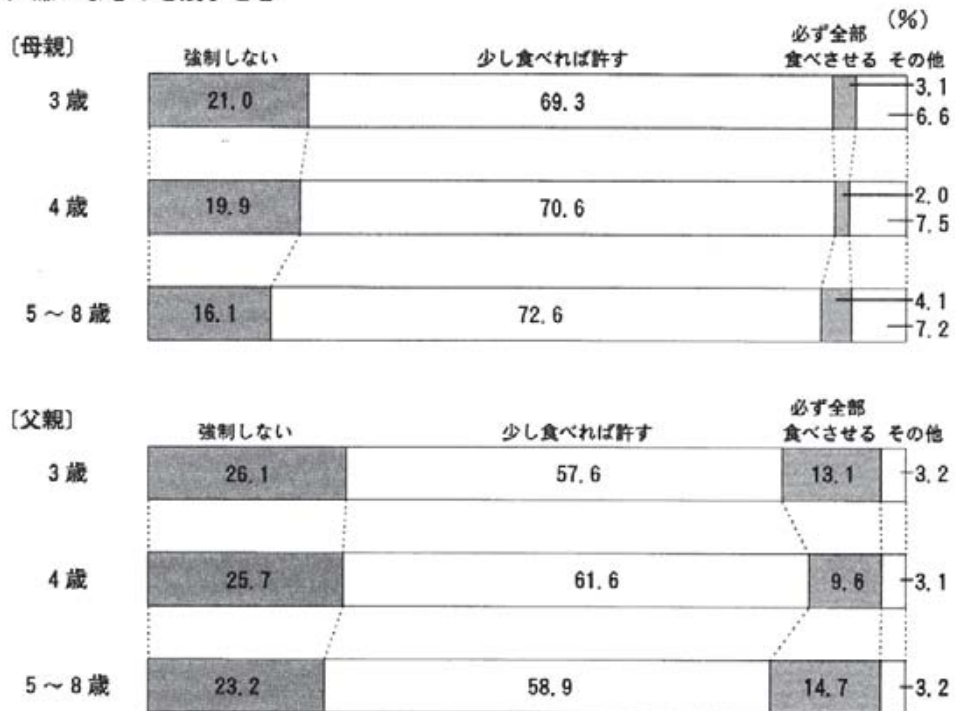
ちなみに図の下に父親について同じ項目をたずねた結果を掲げたが、母親以上にしつけの変化が見られないことがわかる。

図8 しつけ × 年齢

1. 寝る時間でも遊んでいるとき



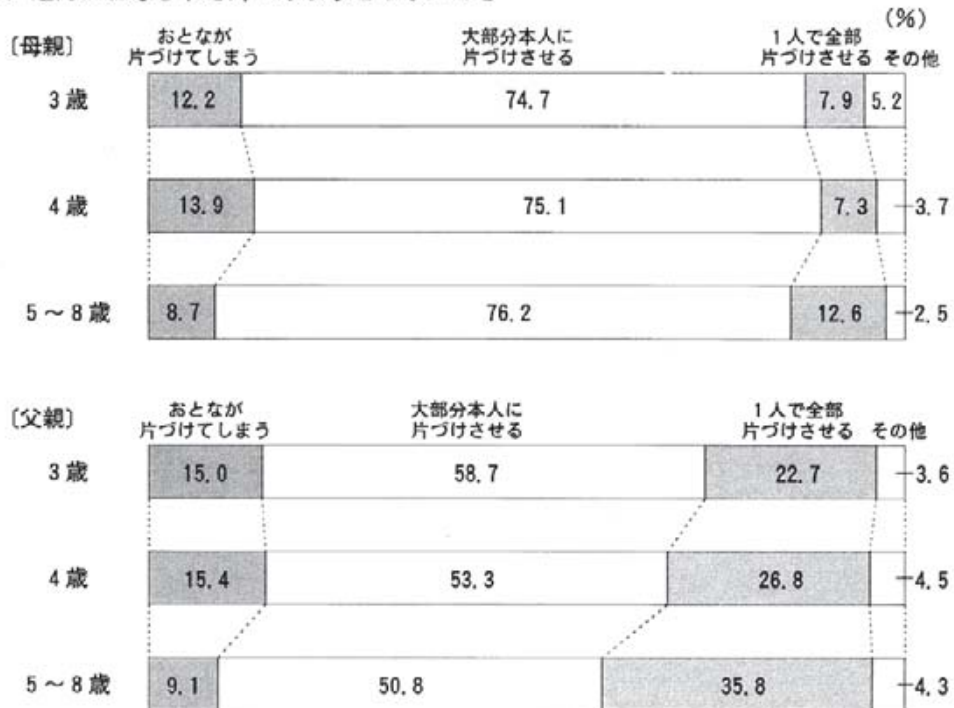
2. 嫌いなものを残すとき



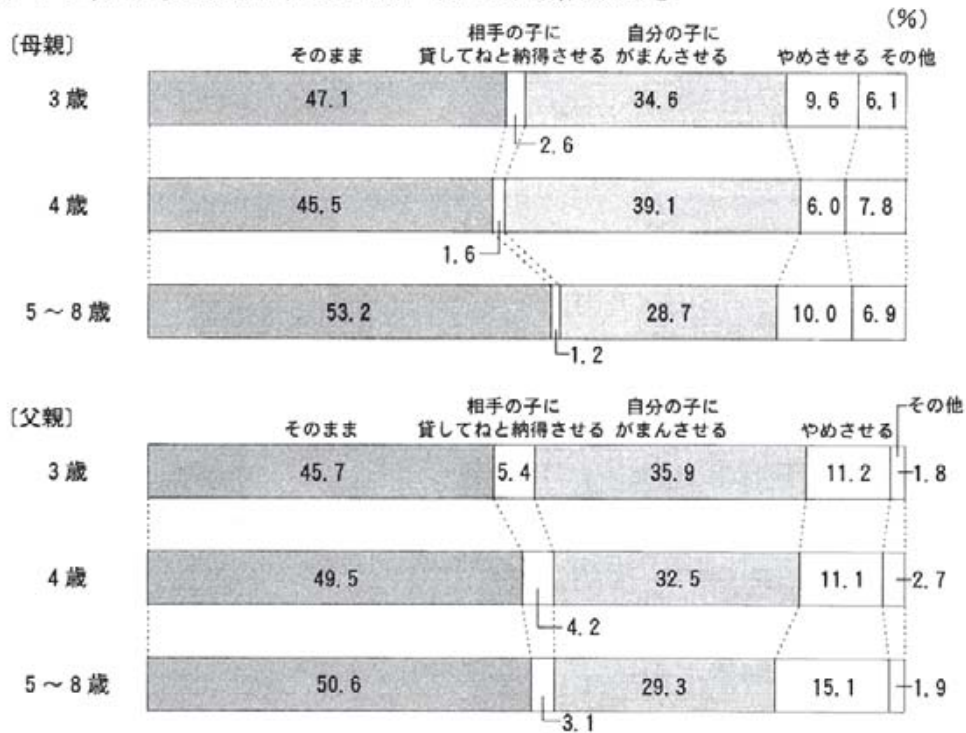
3. 朝なかなか着替えようとしないとき



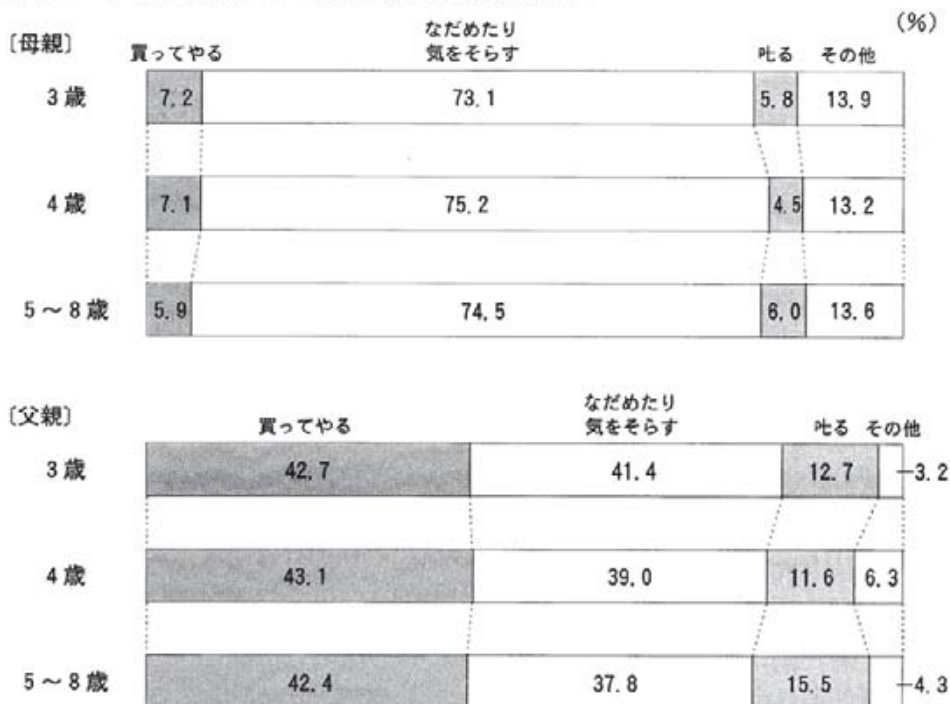
4. 遊んだおもちゃを片づけようとしないとき



5. 1つ年上の子とおもちゃのとりあいでケンカを始めたとき



6. デパートで1000円くらいのおもちゃをせがんだとき



7. 買ったチョコレートを帰り道で食べたいとせがんだとき

(%)

〔母親〕

	食べさせる	特別よと言う	叱ってとりあわない	その他
3歳	21.4	38.4	21.9	18.3
4歳	20.2	41.3	19.9	18.6
5～8歳	20.8	35.8	23.0	20.4

〔父親〕

	食べさせる	特別だよと言う	叱ってとりあわない	その他
3歳	44.7	28.8	21.5	5.0
4歳	41.8	29.4	21.4	7.4
5～8歳	42.7	27.0	23.4	6.9

8. すいている電車の中で友だちと走り回っているとき

(%)

〔母親〕

	そのまま	親が話し相手になる	叱って座らせておく	その他
3歳	15.8	68.0	12.3	3.9
4歳	10.2	70.1	16.8	2.9
5～8歳	10.8	63.1	22.3	3.8

〔父親〕

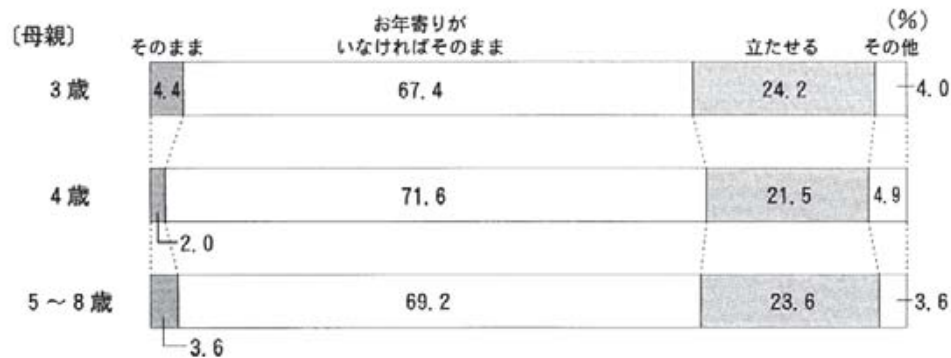
	そのまま	親が話し相手になる	叱って座らせておく	その他
3歳	18.8	42.6	36.8	1.8
4歳	17.0	44.5	36.9	1.6
5～8歳	13.9	40.0	44.9	1.2



9. よそのおばさんに注意されて「バカ」と言い返したとき



10. 電車で席が空いていたら、おとなを押しつけて座ったとき



11. スーパーからガムを持ってきたことに気づいたとき

